

こころで

見る

奈良

もっともっと
知りたい
奈良 8

一行基菩薩

今年は、行基菩薩が生まれてから1350年になる。

近鉄奈良駅に着き、地上に登ると、行基さんの噴水がある。ここが奈良の人たちの待ち合わせ場所だ。

行基は、橋を6つ、道をひとつ、池を15、溝を7つ、樋を3つ、港を2つ、堀を4つ、布施屋を9つ、そして49の寺を造った。

水のない土地は使えない。水がなければ、そこは田畑にならない。行基は、水のない土地を水で潤すことができた。

行基は大きな池を造った。池を掘ったわけではない。ダム湖を造った。川をせき止めるやり方ではなく、溝を造って川から水を引いてくるやり方で。

池のそばに、行基は、寺や、尼寺や、布施屋(福祉施設)を建てた。行基が行くところには、千人が集まったという。「小さな力をたくさん集める」、これが行基の考えの基本である。

行基が世に出たのは45歳の時だった。それまで行基は、大和国の佐紀や生駒の山で母と暮らしていた。和銅3年(710)に母が亡くなると(その年に都は奈良に遷った)、2年間の服喪の生活を送ったあと、活動を始めた。



5年後の養老元年(717)、行基は非難される。当時、僧尼は寺のなかにいなければならぬという決まりがあった。行基の民間伝道は、それに違反していた。

しかし、やがて、行基の評価は徐々に高まっていく。農用地の不足に悩む国家にとって、行基の存在は注目すべきものがあった。新たに土地を開墾すれば一定期間は私有してもよいという法律ができたので、地方の豪族たちにとっても、行基は必要な存在になっていった。

行基の師の道昭も、各地を廻って、井戸を掘り、港を整備し、橋を架けた。

そして、行基は、ついに聖武天皇と出会う。早魃飢饉、大地震、天然痘の大流行など、さまざまな災厄が続く日本を、どうしたら救えるのか、悩み抜いた末に、聖武天皇は、盧舎那仏(大仏)を造る、しかも「小さな力をたくさん集める」というやり方で造ろうと決意する。

ふたりは運命的に出会った。聖武天皇は行基から戒を受けて出家し、僧になった(だから天皇を退位した)。

行基は大仏が完成する前にこの世を去った。しかし、行基は、きょうも、あの噴水の上で、大仏の方角を向いて立ち続けている。

文・西山 厚

(帝塚山大学文化創造学科教授)

○10回シリーズ 次回は8月19日(日)掲載予定

PR

〈企画・制作〉産経新聞社メディア営業局